月報　第486号　東京バッハ合唱団　2002年12月
〒156-0055 東京都世田谷区船橋5-17-21-101　Tel:03-3290-5731　Fax:03-3290-5732
E-mail:bachchortokyo@aol.com　http://www2.tky.3Web.ne.jp/~bach/chor/

こどもの本は心のふるさと

［対談］　中村 美子(団員)
大村 恵美子

３つの記念の年をつなぐ

大村　21世紀になってから、年を追うごとに、これでもか、これでもかというようにスリリングな出来事が世界中に起こり、心を揺さぶられつづけの毎日ですが、2002年も間もなくクリスマスを迎えようとする今日、せめて素朴なこどもの心を思い起こすような話題を、12月号の月報に提供したいと思いました。

３つのことを関連づけて，ここにご紹介しようとしているのですが、１つには、今年の9月に、スイスのバーゼルで美智子皇后が行われたスピーチ。２つには、後援会員の中村妙子様が、久しぶりに創立40周年の私たちの合唱団にエールのおことばを送ってくださったので、満50年を越えた中村様の翻訳のお仕事も、この機会に皆様にご紹介したいと考え、また３つには、小児病棟のこどもたちに本を読むヴォランティアをなさって20年という、団員の中村美子さんからもお話をうかがうこと。こんな３つのことがらを念頭において、中村美子さんとお話をしました。

美智子皇后の快挙

去る9月29日にバーゼルで開かれた国際児童図書評議会（ＩＢＢＹ）の創立50周年記念大会で、日本の美智子皇后（大会名誉総裁）が、すばらしいスピーチをされました。1998年、インドでの大会にも、基調講演者として招待されたのに、インドの核実験などで見送られ、会場でのビデオ講演となって、大きな反響を呼びました。

その内容は『橋をかける―子供時代の読書の思い出』というタイトルで、日英両語で出版され、またロシア語、チェコ語、ポルトガル語、中国語にも訳されたそうです。

経済の落ちこみが長々とつづいて、世界中から失望の声があげられている日本ですが、スポーツ界、映画界、芸能界での活躍、さらに最近になって科学の面でも２人の日本人のノーベル賞受賞など、個人としては広い分野での貢献があい次いでいます。

美智子様の児童文学へのお働きも、すでにお若い時代から知られており、日本の皇后がそのように世界に向かって広く開かれた存在であることを、私はとてもしあわせに思っています。

中村　私も、美智子様がおひとりでスイスまで出かけられて、人々の心をうつお話をして来られたことは、すばらしいことだと思います。私自身、学習院に長く居りましたので、皇室に対しては、とても拘束の多い、むしろお気の毒な存在、という気があるのですが、このように、これからも、お好きなことをどんどんなさって、大いに外に向かって活躍されれば、と願います。

美智子様はお考え深く、また率直なお気持ちを、人々の心にしみ入るように話しかけられ、すばらしいですね。

大村　その1998年の講演は、このような励ましのお言葉で結ばれています。

「どうかこれからも、これまでと同じく、本が子供の大切な友となり、助けとなることを信じ、子供達と本とを結ぶＩＢＢＹの大切な仕事をお続け下さい。

子供達が、自分の中に、しっかりとした根を持つために

子供達が、喜びと想像の強い翼を持つために

子供達が、痛みを伴う愛を知るために

そして、子供達が人生の複雑さに耐え、それぞれに与えられた人生を受け入れて生き、やがて一人一人、私共全てのふるさとであるこの地球で、平和の道具となっていくために。」

児童書の大きな主題は「帰郷」

大村　中村妙子様は、合唱団後援会の発足以来の会員でいらっしゃり、今回ご紹介のためにインターネットで検索しても、まとめきれないほどの分量のキャリアをお持ちの翻訳家でいらっしゃいます。翻訳歴50年を機会に、雑誌「信徒の友」に「掛け値なしに好きな翻訳という仕事」というエッセー（1998年3月号）を書かれたあと、2002年4月号からは、＜「本」との出会い＞というシリーズで、毎号、翻

訳されたものの中から 1 冊を紹介していらっしゃいます。

「児童書について…何と多くの本が「帰郷」を主題としていることか。先に触れた『マクサの子供たち』［ヨハナ・シュピーリ著、1947 年に中村様が初めて翻訳出版された］からしてそうだった。」「帰郷といっても、ある場所への帰還とは限らない。ある人をよく知るようになり、より深く理解し、その人のもとで、その人に見守られて生きたいと願う、ひたむきな想いをも、私は「帰郷」と呼びたい。」

たしかに私にもそう感じられます。よく少年が大冒険をしたあと家に帰りつくと、「お母さんが温かいココアをつくってくれました」という結末がありますが、そこで読者はホッとするのです。

中村　中村妙子様のことを、この機会に少し学びましたが、もちろん児童書ばかりでなく、東京大学の西洋史学科のご出身だけに、訳された本の範囲もとても広く、また英文学でもなかなか高度で奥深い作品も多くて、私など簡単にはついてゆけないようなものもあります。先日あわてて読んでみましたＣ．Ｓ．ルイスの大作、別世界物語３部作の『マルカンドラ』『ペレランドラ』『サルカンドラ』なども、私は最初の『マルカンドラ』で早くもギブアップしそうになりました。

それにつけても、お好きな作品を精読なさって、翻訳三昧に生きていらっしゃる、とてもおしあわせな方なのですね。「信徒の友」のシリーズも 4 月号から 11 月号まで読ませていただいて、本に囲まれて過ごされたご幼少の時代から、深い信仰を培われながら、一筋に海外の良書を日本の広い層に提供してこられた、ほんとうに実り多い「ものみなすべて良し」の人生でいらっしゃることを思います。

大村　その中村妙子様が、「長い堅実なお働きに敬服します」とお励ましくださったので、私も勇気づけられ、今後もバッハの訳詞をつづけてゆこうと心を弾ませることができました。ありがとうございました。

こども自身の意欲を引き出すヴォランティア

中村　『わたしの好きな子どもの本 50 冊―小児病棟のこどもたちといっしょによんだ本の中から』を昨 2001 年 1 月に出版し、合唱団の中で、医療関係のお仕事をしていらっしゃる方々にお贈りしましたところ、大村先生から、他の団員の方にもご紹介したら、とのお話がありましたので、寄付として 1 冊 1000 円いただき、たくさんの方々のお手に渡りましたこと、大変うれしく思っております。渡邊明先生からは、3 冊も追加のご注文をいただきました。ほんとうにありがとうございました。

1982 年 10 月、前橋の済生会病院小児病棟に「ぐるんぱ文庫」をつくり、本をとおして病床のお子さんたちとおつき合いして、ちょうど 20 年になります。出版以来、ときにはお話を依頼されることもありますが、本来ヴォランティアとは、黙ってそっとするものと思っておりますので…。

「導きの星」

目白聖公会聖堂のステンドグラス（1889 年, ロンドン製作）．イングランド島南西端ツルーローのエピファニー修道院より寄贈

近ごろとみに「読みきかせ」という言葉がはやり、実際に行われていますが、私はあまり好きでなく、むしろ抵抗を感じます。きかせるというのではなく、1 冊の本をとおして、その世界を「あなた」と共有するということをいちばん大切に思いたい。だから私はマンツーマンを基本とします。また、入院生活という、ほとんど選択肢のない日々の中で、せめて本くらいはチョイスできるようにと、ひとりひとりの、お子さんの年令、性別、病態などに見合ったものを、数冊からときには 10 冊くらいベッドサイドに持参して、できるだけ本人に選んでもらうよう努めます。そして自分で選んだ本が気に入って、たとえわずかな時間でも、本来のこどもらしい気分を取り戻して、笑顔をみせてくれたら、私はそれで十分なのです。

「黄金（冠）」

宝物のように、本との時間を待ちうけていた子が、つぎに行くと、もうこの世を去っている、というようなこともあり、やりきれない思いをすることもあります。でも、病床のこどもたちには、一般のこどもたちよりもずっと大きな力を、本が与えてくれることがわかります。

巻物（Ⅰ）

大村　中村さんは、大病をされたときにも、すばらしい精神力で乗り越えて、合唱団にいち早く復帰なさり、ほんとうに感心しましたが、20 年もの長い間、ご自分で図書を補給なさって

「乳香（香炉）」

は、こどもたちの友となって、かけがえのないお仕事を貫いていらっしゃいます。

こどもが本を好きになると、それは途方もなく豊かな世界が広がるので、幼いときの環境や、よい人々との出会いが、一生のしあわせに深く影響するのですね。あなたも、美智子様も、中村妙子様も、戦時を経たにもかかわらず、世界中の本に接するこども時代に恵まれて育たれました。

私も、両親が揃えてくれた本には、世界中のこどもが活躍する物語も多く、こどもたちの名前や、オデッサ、ドレスデン、アントワープなどという地名も、好奇心にかられて口ずさんだものです。また小学 4,5,6 年と担任だった先生が、学級文庫を始めてくださり、家にはなかった本を片端から読みあさり、表紙や挿絵の色、紙質のクリーム色がかったつややかさや、グレーで高級な活字の色、また本の独特な香りなど、五官にうったえるすべてが幸福の源泉でした。

「没薬（杯）」

バッハも日本人の財産に

中村　そうですね。私は、本が好きで夢中ならばそれでよい、という考えです。どんなプラスがあるかというよりも、その時に、ああいいな、と過ごせれば、それが一番だと思うのです。

昨秋、招かれて行った草津町立図書館では、その場で自由に読めるスペースがあって、こどもたちが学校から帰ってきて、「ただいまー」とランドセルを放り出しては、本に読みふけっている姿がとても印象的でした。

「巻物（II）」

大村　家でも、本はどんどんふえていたので、友だちが遊びにくると、「おやつだから来てー」と呼んでも生返事で、本を離そうともしないで、私はつまらない思いをすることもよくありました。でも、そんなに夢中になる友だちをほほえましくも感じていました。

中村　その時々に夢中になれればそれでいい、といっても、結果としては、それでこどもの内面世界は広がり、想像力が養われて、ああ、世の中にはいろんな人がいて、いろんなことが起きるのだ、ということが身についてくるのですね。私は、つとめてアジアのお話の本を買うようにしていますが。そのようなことが、世界の平和にとって、とても大事なことなのですね。

大村　そう、世界にはいろんな人がいて、とても楽しいのだ、という信念が早くに形づくられ、人種差別とかコンプレクスなど、住みつく余地がなくなるのではないでしょうか。

ここで私が思うのは、「人はパンのみにて生くるにあらず」、やはり落ち着いた家の中で、ゆっくり本に親しめるのも、難民生活ではとてもできないことです。ですから、そういうものを取りあげる戦争で、破壊の後に食料など配給したくらいでは、こどもは育つわけがないのです。

また、翻訳について考えるならば、私たちの知識の大半は、翻訳のおかげで体内に入ってきたものです。ゲーテも、シェイクスピアも、翻訳がなければ、私はついに無縁でしかないでしょう。ほんとうに翻訳の方々には感謝するとともに、バッハも、「わらべはみたり」や「きよしこのよる」などと同じように、私たち日本人の財産となることを、夢見ないではいられないのです。

カードテリア、新装「丸ビル」に進出

後援会員・深津大慈氏の経営する輸入グリーティングカード専門店「カードテリア」が、東京駅前に新装成った「丸ビル」に進出しました。

丸ビルは９月にオープン以来、予想外の評判となり、連日たいへんな数の買物客、観光客でにぎわっています。

「カードテリア」も、その愛らしい商品で客足を集め、クリスマスカードを中心に、大繁盛です。中央エスカレーター脇の４階にある見つけやすいお店ですから、皆様もいちどいらしてみてはいかがでしょう。

丸ノ内店　03-3240-0130
自由が丘店　03-5701-1970
イクスピアリ店　047-305-5707
11:00 ～ 21:00(日・祝 20:00)
年中無休

柳沢清さんを送る夕べ

松尾 茂春（団員）

秋も深まった2002年10月23日(水)、午後6時30分より、中野区にある日本キリスト教団更生教会にて、前日22日の昼前に61歳で天に召されたテノールの柳沢清さんを送る前夜式が行われました。

会堂には故人を想う大勢の人々が静かに時を待っています。定刻となり、オルガンによるバッハの厳かな調べをもって式が始まりました。この演奏を含む全体の奏楽は、これまで柳沢さんが指揮する教会聖歌隊や、企画・推進に力を注いだチャペル・コンサートで奉仕されている向山博子さんでした。続いて司式者である原田謙牧師によって、ヨハネによる福音書11章 25～26節 が読まれた後、讃美歌312「いつくしみ深き」をもって会衆讃美があり、詩編 23篇の朗読、祈祷、そして故人愛唱歌と記された讃美歌496「うるわしの白百合」による会衆讃美に続いてお２人の方による「感話」がありました。

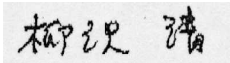
１人目の東喜代雄さんは、柳沢さんがその設立のために祈り注力した朝祷会を代表する方で、そのお話を通し、柳沢さんの信仰者としての真摯な姿とその働きを知ることができました。

２人目の竹内惠さんは、柳沢さんの設立されたパラビジョンの仕事としてバッハ合唱団の定演を録音される姿でお馴染みの方も多いかと思いますが、柳沢さんと同じく音楽を愛するクリスチャン技術者の視点から、また柳沢さんの片腕となって働いた立場から話されました。それを通して、柳沢さんがパラビジョンでの仕事にかけた熱い夢と使命感の尊さを再確認すると共に、ビデオ伝道、オーディオ、教会音響などを通して、時代の先端技術と信仰を結ぶ者として自らにインターフェイス(Interface(faith))という洒落をあてていたことを知り、その思いが心に染みました。絶えずアイデアを創出し、希望と自信をもって実行する姿がその笑顔と共に心に浮かんできます。

この「感話」の後、東京バッハ合唱団有志による合唱の時となりました。割り当てていただいた会堂向かって左手前方の席に、30人を超える合唱団有志が集まり、その場に立って「ヨハネ受難曲」の第39曲 "Ruht wohl ～"「憩え 聖なる屍」と第40曲の最終コラールを歌います。かつてテノール宮崎茂さんのご葬儀にあってこの曲を歌ったことを思い出しますが、考えを重ねた末、やはり今度もこの曲がふさわしいということで大村恵美子先生が選ばれたものです。その大村先生自らが弾かれるピアノによる思いのこもった第39曲導入に導かれ、皆の心から歌が湧き出で、会堂を満たします。CD等できびきびした調子の演奏を聴き慣れた人にはずいぶん緩やかなテンポであったかもしれませんが、この日この場で歌うにふさわしかったのではないでしょうか。「憩え」の動機が波のようにくりかえされ、悲しみを安らぎが包み込んで曲が閉じられると、続く最終コラールは憩いと復活への希望が確信となり、喜び・感謝・讃美に至ります。ピアニッシモで遠くから天使が…そんな感じで歌いだしたいという理想を技術面でどこまで実現できたかはわかりませんが、思いにおいて目指すという意味では一致していたのではないでしょうか。

引き続き、原田牧師による式辞があり、その中で、柳沢さんが、9月4日に病床で書かれた次の美しい文章が読まれました。

ゆりの花のしらべにあわせて



詩編第 45 篇に「聖歌隊の指揮者によって ゆりの花のしらべにあわせてうたわせたコラの子のマスキールの歌、愛の歌」と記されている。

病室の窓辺に、2本のゆりがよりそって咲いている。それぞれ頭に3～4つの白い花をつけ、私の入院生活をなぐさめてくれた。

聖歌隊の指揮者の感じた「ゆりの花のしらべ」とはどんなに美しかったのだろうか。

うるわしの白百合　ささやきぬ昔を
イェス君の墓より　いでましし昔を
（讃美歌496番）

この作詩者も、白百合の花が、イェス様の物語をささやいているのを感じたのであろう。私もゆりの花のしらべ、ささやきを聞きたい。

毎日、白百合の花を愛でながら、耳をかたむけていた。

8月の終りに近づくと、さすがに この夏のあつさにたえかねたのか、花はちってしまった。しかし、私はこう思った。私をなぐさめる務めを終えたあの百合達は 主のひざもとで、地上よりも、尚いっそうるわしく、咲きほこり、そのラッパの様な花から、主に向って讃美のしらべを高らかに鳴りひびかせているのだと。

私も このゆりの花のしらべにあわせて、高らかに主を讃美しよう。

主をほめよ,わがこころ　いまわのときまで
わが生くる日のかぎり　主をたたえまつれ
この身と たましい　たまいしみかみを
ハレルヤ ハレルヤ
（讃美歌20番）

様々な艱難や病の中にあっても、愚痴をこぼすことなく静かに前向きに受け止め、ビジョンをもって神を讃美しつつ進み行く柳沢さんらしい生き方の香りが感じられました。

また、この後、9月27日に大村先生ご夫妻から届けられたバッハ全集のCDを病床にあって聴くことで大きな平安を得たことも紹介されました。それが単なる音楽でなく讃美となり「本当にもう私は満足です。もう私はこれでいつ死んでもいいと思っている、しかし私の家族の者を思うと、なお生かさせていただきたいと思う」と語られたとのこと - 死と生に真直ぐ向き合うバッハの音楽を通してこそ得られる深い思いなのではないでしょうか。

祈祷の後、奥様の千鶴子さんが柳沢さんの生き方にふさわしいとして選ばれた聖歌588「主とともにあゆむ」をもって会衆讃美 - ご長男のお名前「歩」君にはこの思いが込められているのでしょうか。

頌栄541「父、み子、みたまの」そして終祷をもって礼拝を閉じ、引き続き叔父となる川名恵三氏による挨拶をいただきました。形どおりの挨拶ではなく、幼い頃からの柳沢さんを知り生活も共にした方ならではの愛情と想いのこもったお話を通し、「人を愛し、いつも柔和で前向きだった」人柄を思い浮かべるのでした。

最後の献花の時となり、バッハのオルガン演奏が流れる中、一人一人想いを込めて花を置き家路につきました。

思い起こせば、柳沢さんがバッハ合唱団に入られたのは1983年夏の第1回ドイツ・ヨーロッパ演奏旅行にご夫妻で参加されたのがきっかけでした。

以来、合唱のテノールの重要な一翼を担うとともに、合宿のミニコンサート、クリスマス会等での独唱でも美しく柔らかい歌声を聴かせてくださったことも忘れられません。また、演奏旅行でのビデオ撮影、定演、野尻湖コンサート、「ばっはめいと」他での録音・編集等、音響面の担い手でもありました。最初の奥様との死別、千鶴子さんとの結婚、歩くん・古都美ちゃんの誕生、ご家族そろっての野尻湖合宿参加…、悲しいこと、喜ばしいこと…様々なことが思い出されます。5月12日の演奏会では、手術後回復された元気な姿でロ短調ミサ曲を熱心に聴き、見守ってくださったのでした。もう、今はあの伸びやかな歌声にも、柔和な笑顔にも直接接することはできません。しかし、思い出でとしてのみならず、その献身をもって与えてくれた有形・無形の恵みを通して、柳沢さんは私たちの心に在り続けることでしょう。

残されたご家族の祝福を祈り、また共に在り、共に語り、共に歌うことができたことを感謝しつつ、ヨハネ受難曲最終コラールに歌われる希望・確信を柳沢さんと共有していきたいと思います。

PHOTO：千葉光雄(団員)

ああ 主よ 時いたらば
み使いに われを運ばしめたまえ
かの日 来たるまで
わがなきがらをば 憩わしめたまえ
ふたたび目覚めて 御顔仰ぎみん
喜び溢れ おお わが恵みの主
イェスきみ 聞きたまえ
とわに わがほめ称(たと)うるを
（大村恵美子：訳）

異常事態に陥った2002年

大村 恵美子

大規模な地球破壊と人間同士の大量殺戮に明け暮れた20世紀が終わり、今度こそクリーンな出発を、と心に期して迎えた21世紀でしたが、蓋を開けるか開けないか、早々に、世界中に不協和音が氾濫し、その惨状は20世紀の延長どころか、手に負えないほどの深刻さとなってきました。

最近偶然手にした2冊の本で、私は1930年代のドイツと日本が、どのようにしてとんでもない破壊戦争に突入していったかを、改めて考える機会を得ました。それは、エーバーハルト・ブッシュ著『カール・バルトと反ナチ闘争－1933-1945年 ユダヤ人問題を中心に』上・下巻（日本語版・新教出版社、2002年10月刊）と、ハーバート・ビックス著『昭和天皇』上巻（日本語版・講談社、2002年7月刊、下巻未刊）の翻訳書です。

そこで考えさせられたのは、何らかの情念的憎しみや、優越感・劣等感などから、人間はいくらでも行為にゴーサインを与えるような理屈を捻り出し、自己暗示にかけて、悪へと突入するものだということです。ドイツの教会の場合、イェスの福音にしたがえば、ユダヤ人を排斥することは許されないのは明白なのに、それを「ドイツの＜固有の生＞を脅か

すユダヤ的なもの」とか、「ドイツ的なものとユダヤ的なものとの生物学的・歴史的関係」とかの理屈をくり返し、「教会が国家原理に反する原理に従って自らを構成するならば、教会は良かれ悪しかれ国家の中の対立国家となろう」と、どんどん退いていったのです。日本でも、隣国が＜日本の生命線＞などという身勝手なスローガンで、防衛という名の侵略になだれこんでゆきました。

ところで、現在は、ここに大きな新事実があります。世界中の非難の声と注視のただ中で、イスラエルはパレスチナを破壊しつづけ、アメリカはアフガニスタンを、イラクを、破壊しています。富みが貧を地球から住民もろとも抹殺しようとしているかのような図です。第２次世界大戦を終わらせるために、うるさい日本人を黙らせたのも原子爆弾であり、ソ連の突然の参戦という修羅場の登場でした。21 世紀では、強者が、束になった地球上の反対者を吹き飛ばすような威力で、その暴力を全開させようとしているのです。人間の叡智など、もう出る幕はないのでしょうか。

この 1 年間、アメリカのことを、私たちは見てきました。青天の霹靂のように、突如世界の人々の目に飛びこんだ 9.11 の悲劇も、それ以前に、アメリカとタリバーンとの長いやりとりがあった結果だったので、偶然ではなかったのだとわかってきました。アフガニスタンがまだ片づかないのに、イラク攻撃と叫ばれだしたときは、アメリカももう理性を失って、狂気にのめりこんでしまったのかと、おそろしくなってきました。

しかし、テレビなどで、アメリカの政治家、専門家、学者、さらには一般の学生たちが、「やられぬ前に先制攻撃を」と、真顔で説くところを何度も見るうち、かれらは、本気でそれしか選択肢がないと確信しているらしい、と思えてもきました。このようなアメリカを前にして、私たちは、この場合もやはり、「絶対反対」ばかりを投げつけるだけでなく、アメリカの現在の症状をよく知り、そしてなんとか救い出してあげることを、考えるべきではないでしょうか。

1 年前の、あれよあれよと軍事行動に呑みこまれて、言葉を失ってしまった状態から、世界もだいぶ冷静になってくる傾向にあります。最近見聞したものの中で、私がもっともわが意を得たと思って読んだのは、入江昭氏が朝日新聞に寄稿した「＜戦争＞と難民問題」でした。戦争になれば、日常の市民生活を壊され、異常な生活を、一時期あるいは一生、さらに何世代にもわたって強いられる人々が発生し、地球上の均衡を乱す。それだけでも、戦争は避けなければならないのです。破壊後の再建や救済など、いくら大規模に行なっても、戦争を避けることから比べれば、まったく比較にならないダメージを広範囲に残しつづけるのです。このことを、人道上のお説教ではなく、損得勘定の上からも、しっかりアメリカに悟らせ、イラクに悟らせ、たがいに大量破壊兵器でおどし合うような幼稚なことを、自ら放棄させるように努力するのが、私たちの務めです。日本は、経済利益の面一本槍でもよいから、戦争の損害を説きつづけるべきです。

いま、入江氏の文中、数値的にあげられている個所などを引用してみます。

「ヨーロッパ各地で非合法に滞在し、低賃金で肉体労働に従事している人たちは、数百万人に及ぶとみられている。」

「今日存在する難民の多くは、過去の戦争や内戦の副産物であり、かりにこれからイラクで戦争が始まるとすれば、その数が一層増大するであろうことは目に見えている。」

「古代から、戦争は流浪の民、避難民を作り出してきた。極端にいえば、戦争には世界の人口を再分布する、という面がある。」

「20 世紀の戦争や内戦の結果生まれた難民の数は膨大である。…現代の世界には、統計に載っているだけで、約 1 億５千万人のマイグラント（流動民）がいるといわれる。…実際には、おそらく２億５千万人以上、すなわち世界人口 60 億の 4%ほどが、故郷を出た「異邦人」の状態にあるのではないか。」

「20 世紀初頭、いわゆる帝国主義の時代には、…被支配人口の 4%足らずのヨーロッパ人が、アジア、太平洋、中近東、アフリカなどの土地に出かけて行った、ということになる。現在の世界では、逆に地球総人口の 4%ほどが、これらの土地を離れて流浪し、…不安な日々を送っている。もともと帝国主義国家の植民地だった土地からのものが多い。その意味でも、先進諸国は難民問題と積極的に取り組むべきであろう。」

「米国の単独行動主義を非難するのは容易だが、その日本も難民問題では、国際協調主義をとっているとはいえない。むしろどの国にもまして、自国中心的・排他的であるように見える。」

「マイグラント問題の国際規模での解決を目指して、各国と積極的に努力していくべきであろう。」

× × ×

新年（2003 年）は、私たち日本人が、力と立場に相応した、平和への発言と実践を、勇気をもってつくり出してゆく年でなければならないでしょう。